

なからぎ

233号

2021年4月

重層的「緊急事態」—コロナ禍のなかで忘れてはならないこと

図書館長 小林 啓 治

2021年1月9日に放映されたNHKスペシャル「暴走する温暖化「脱炭素」への挑戦」は、地球温暖化が新たな「フェーズ」に入ったという深刻な内容を伝えていた。このままいくと早ければ2030年にも、地球の平均気温は臨界点に達し、温暖化を加速させる現象が連鎖し暴走が始まるという。そして、この10年間の取組が地球の暴走を回避することができるかどうかの鍵を握るらしい。昨年来のコロナ禍は終息していないものの、この地球的課題を一刻たりともおろそかにすることは許されないだろう。

温暖化の問題を考えるにあたって、実は「京都」が重要な意味をもっていることは、ほとんど言及されることがない。府立大学のグラウンドの西南端から鴨川に向けて進んだところに、京都議定書（1997年）のモニュメントがあることは、京都市民の間でもそれほど知られているとは思えない。前述のNHKの番組では、ポツダム気候影響研究所のヨハン・ロックストローム博士が、「残り時間はわずかで、緊急事態の真ただ中にいる」と訴えていた。昨年来、二度にわたって緊急事態宣言が出されたが、私たちは二重の緊急事態の中にいることを忘れないようにしよう。

これに関連して、近年、「人新世」という言葉をしばしば耳にするようになった。「人新世」とは、人類が地球の生態系や気候に大きな影響を及ぼすようになった時代であり、完新世（現在）から、人類による地球環境への影響が顕著になった近年だけを切り離そうと提案されている新区分である。昨年、この言葉を用いて脱経済成長を主張した斎藤幸平『人新世の資本論』が話題になった。すでに10年前に、セルジュ・ラトゥーシュ『経済成長なき社会発展は可能か?』も、脱経済成長論を詳しく展開している。斎藤はこれを旧世代の脱成長論として批判し、ラディカルな脱成長論を展開している。私にはその適否を議論する能力はないが、金科玉条となっている経済成長そのものを狙上にのせて議論することは、いま最も必要なことではないだろうか。

さて、話は変わって、最近読んだ中で強く印象に残ったものに、ウェンディ・ブラウン『いかにして民主主義は失われていくのか』がある。ブラウンによれば、ここ数十年の間に、人間の〈ホモ・ポリティクス〉的側面が弱体化し、〈ホモ・エコノミクス〉的側面が肥大化しているという。経済成長や経済合理性という単一の基準が世界を覆い尽くし、自分自身を資本家と見立てて経済競争に勝ち抜くことが迫られる世界では、格差が容認される。平等という価値は衰退し、その結果、民主主義は危機に瀕せざるをえない。ブラウンや斎藤の主張をつなげてみると、飽くなき経済成長は地球温暖化をもたらすばかりでなく、民主主義の危機とも密接に絡み合っていることがわかる。

夢をもって大学に進学した皆さんにとっては、とても重苦しい話で恐縮だが、その分、大学教育が引き受けなければならない責務がとてつもなく大きいということを私は言いたい。若い世代がどれだけ深く幅広い教養を身につけ、固定観念を打ち壊していけるか、大学での学びに大きな責任が課されているといえよう。世界ではグレタさんをはじめ多くの若者が声をあげつつある。彼らは「人類」や「文明」といった時間的スケールとアイデンティティで思考していることが、改めて注目される。ウイルスと人との関係も、私たちの極めて短い時間認識に根源的な反省を迫っているようである。

是非、図書館を利用して、こうしたスケールで思考できる力を養ってほしい。図書館がそれを支援できるよう蔵書やデジタルブックを整備していきたいと考えている。



地球からのメッセージ ZERO

イメージ都市・京都

文学部歴史学科 上 杉 和 央

京都に暮らしていると、いろいろなドラマのロケ現場に出会います。四国から京都に出てきて大学生活を始めた頃は、そういう現場にドキドキしていたのですが、すぐに慣れてしまいました。確かに、毎週のように〇〇刑事や探偵××が京都中を駆け回り、難事件を解決しないとまらないのだから、そりゃあロケも多くなるわけです。京都府立大学（女子短期大学部）を卒業した山村美紗さんの原作による作品もたくさん放映されていますよね。そういえば、現在は京都学・歴史館へと移転して現在は使用されていない旧・京都府立総合資料館の建物も某ドラマの中で〇〇署として利用されていましたっけ。

こうしたテレビドラマを含め、京都という都市は実に多くの文化芸術作品の舞台となってきました。私の専門とする地理学のなかには場所イメージの生成や変化を研究対象とする分野があります。場所イメージは記憶と結びついて生成されていきますが、個人の記憶（思い出の場所）のほかに集団によって共有された記憶が大きな役割を果たすことがあります。そして、実際に起きた出来事が語り継がれることもあれば、まさに文化芸術作品で編まれた内容（フィクション）が読者・観客に大きく響くことによって共有されることもあります。「京都では毎週殺人事件が起きるけど、見事解決される」イメージもそうした共有の賜物でしょう。

たとえばパリ・オペラ座といえは「怪人」が地下にいて、シャンデリアが落ちてきそうなイメージ、葛飾・柴又といえは大きなカバンを担いだ「フーテン」がドタバタ劇をおこす下町イメージといったように、文化芸術作品の舞台となった場所は世界各地にあり、それぞれイメージが培われてきています。そうした中でも京都はイメージの源泉になり続けている屈指の場所だと思います（いや、調べたわけではないので、それこそ単なるイメージなのですが）。しかも京都の場合、前のイメージに後のイメージが上書きされたり、複数のイメージが混ざったりと、なんだかとても複雑なイメージ形成がなされています。そこが京都の奥深さの1つでしょう。

実際のところ、「京都」という1つの固定的なイメージがあるわけではなく、お寺や神社、もしくは地区ごとに小さくて複雑なイメージがあり、それが積み上げられて都市全体のイメージが形成されています（常に化するのもそのためです）。ある意味で、イメージによって作られた都市、それが京都かもしれない。ですので、1つ1つの場所のイメージを感じるができるかどうか、京都を楽しむコツだったりもします。そして「怪人」や「フーテン」の活躍をきちんと理解していれば（つまり観賞していれば）オペラ座や柴又をより堪能できるように、京都の各地を舞台にする作品に触れば触れるほど、

日常生活が楽しくなるわけです。

自分の好きな作品の舞台をめぐる動きを、中近世の寺社参詣の旅行様態に重ね合わせて「聖地巡礼」と呼ぶことがあります。アニメや映画のロケ地が「聖地」となって多くのファンが「巡礼」する行動がよく見られますが、別にこうしたことは近年に限った現象ではありません。歴史的にも文化芸術作品の舞台に人々が思いをはせることはよくありました。たとえば、二条城の北西に位置する二条公園のなかには「鶴池（ぬえいけ）」がありますが、これは源頼政が鶴退治をしたときに鏃（やじり）を洗った場所という伝承が伝わって整備されているものです。この場所は江戸時代には京都所司代の屋敷地だったのですが、その時すでに鶴池があったので、伝承が実際の場所整備に影響を与えているという点ではかなり老舗の部類ですね。鶴池は、傍らにたたずむ鶴大明神とともに、今なおある種の「聖地」となっています。

同じ鶴でも景観から抹消された場所もあります。左京区岡崎エリアは平安神宮や京都府立図書館、京都市京セラ美術館などのある地区として知られていますが、近世は聖護院だいやみや聖護院かぶなどが栽培されていた近郊農村地区でした。その田畑のなかに「鶴塚」と呼ばれる塚がありました。近代になって文教施設の整備がなされるなか、鶴塚の場所はグラウンドになりました。グラウンドの真ん中に塚があったらさぞかし邪魔だったろうと思います。ただ、その塚を壊すことができない事情もありました。というのも、鶴塚は後高倉太上天皇の陵墓の可能性があるととして、宮内省が陵墓参考地に指定していたからです。触れてはならないまさに「聖地」として位置づけられた、ということになります。

鶴の塚から天皇の陵墓へというダイナミックな変化もすごいですが、それを取り囲んでグラウンド整備をしてしまうのも、何とも言えず面白いところです。

ただ、やはり邪魔だったのでしょうかね。戦後直後に京都市がこの塚を発掘調査したところ、陵墓ではないことが判明し（と同時に鶴の塚でもないこともわかったわけですが）、陵墓参考地としての指定が解除され、塚は取り壊され、今では平らなグラウンドになっています。唯一の陵墓参考地の指定解除事例として、ものすごく狭い界限では有名な出来事です。

物語の世界が地名に表れた例でよく知られているのは「夕顔町」でしょうか。夕顔と言えば、『源氏物語』に登場する女性の一人。夕顔は五条界限に家があったという設定で、光源氏が近くの屋敷に誘い出したところ、その夜に夕顔は死んでしまいます。江戸時代には堺町通高辻下る付近の民家の裏手に夕顔の塚と伝わるものがあつたそうで、付近は「夕顔町」とも呼ばれていました。江戸時代前半の『京雀』にそのエピソードは載っていますし、江戸時代後半の出版京都図には「夕顔丁」と明確に表記されています。令和の現在も「夕顔町」という町名ですので、みなさん、ぜひ探してみてください。

京都の中には、こうした小さなエピソードが溢れんばかりにあります。せっかく京都に住んだり通ったりするのであれば、自分ならではの「聖地」を見つけ、「巡礼」してみたいかがでしょうか。

そういえば、京都府立大学が登場する作品もあるんですよ。その作品が好きな人にとってみれば、通学がそのまま「聖地巡礼」なのでしょうね。

図書館からのお知らせ

☆令和 2 年度の図書館運営委員会の活動

学内の教員等で構成される図書館運営委員会では、昨年度、ワーキングを含め計 6 回の会議を開催し、従来の教員選書のほか電子図書の購入、電子ジャーナルやデータベースの見直しなどを協議しました。また、図書館の運用に関わる各規程の現状に則した改定や、本学の教育研究基盤となる適正な蔵書の構築を目指すために「図書館資料収集方針」を策定し、これらの規程を役立てながら、今後も図書館の円滑な運営と整備の充実を図ってまいります。

☆日本社会福祉施設歴史資料について

社会福祉法人健光園（旧名 壽樂園）前理事長 小國英夫氏が、著書「京都嵯峨壽樂園日誌」を全国の福祉施設に寄贈された際に集められた、各施設の周年誌など約 130 点の資料です。令和 2 年 1 月に当館へ寄贈のお話があり、この度、利用可能になりました。

☆「学生希望図書」制度で、読みたい本を図書館に入れよう！

探した本が図書館になかった場合、「学生希望図書制度」を活用しましょう。

対象者は、学部生と大学院生です。「学生希望図書申込書」に購入希望図書名等を書いてカウンターに提出してください。図書館が予算や収集方針を踏まえて購入し、御本人に連絡します。この制度は京都府立大学後援会からも支援をいただいています。

㊦ 1 年生のための図書館基礎知識～これまでと違う図書館～

Mr. 司書：入学式おめでとうございました、図書館にも是非、足を運んでくださいね。

新入生：図書館なら高校にもあったし、そのうち行くと思います。

Mr. 司書：突然ですが、ここで問題です！ ジャッジャン。

新入生：急な展開だ。

Mr. 司書：小学校の図書館、中学校の図書館、高校の図書館そして大学の図書館。この中で 1 つだけ設置根拠が違う図書館がありますが、どれでしょう？

新入生：みんな学校の図書館でしょ？

Mr. 司書：答えは、大学の図書館です。他は学校図書館法で規定されていますが、大学の図書館だけは、学校教育法に基づく大学設置基準が根拠になっています。

新入生：つまり？

Mr. 司書：高校までの学校図書館が、学校のカリキュラムを支援し豊かにすることを目的として、設置が義務づけられているのに対し、大学図書館は、その大学の学生・教職員の学習・研究に必要な資料を保存し提供する組織なのです*。活動も様々で、例えば府立大学では、資料の提供だけでなくオリエンテーションやライブラリツアーなど学生を支援する企画や、京都府立京都学・歴彩館との連携、地域貢献活動として府民利用サービスなどを行っています。

Mr. 司書：3 回に渡り連載してきた Mr. 司書シリーズも今回でおしまいです。

学生のみなさん、思いっきり学び、心ゆくままに研究し、そして楽しむために、ぜひ、図書館を御活用ください。

(※参照 公益社団法人日本図書館協会 HP「図書館について 図書館の種類」)